

透視・撮影プロトコルの見直し前後の不整脈アブレーションの手技線量の比較

阪井 裕治¹、有田 圭吾¹、馬場 雄介¹、肥本 大輔¹、高尾 由範¹

¹大阪公立大学医学部附属病院

【背景・目的】新しい医師の着任に伴い不整脈アブレーションの透視パルスレートと撮影フレームレートを見直した (Pre : 6pulse/sec, 7.5 frame/sec, Post : 3pulse/sec, 15frame/sec)。プロトコルの見直し前後の不整脈アブレーションの手技線量を比較したので報告する。【方法】PVI のうち、CAG など他の手技を同時に施行していない症例を除外した連続 30 例 (Pre : 2025 年 1-3 月, Post : 2025 年 5-8 月) の撮影数、透視時間、Ka.r、KAP を比較した。両軍の患者背景 (Pre/Post、中央値) は、性別 (男) : 16/22、年齢 : 74/75 歳、身長 : 163/166cm、体重 : 59/70kg ($p < 0.05$) であった。【結果・結論】Pre/Post の順に手技線量の中央値[四分位数]を示す。撮影数は 45[2.5-64]/0[0-0] 回 ($p < 0.01$)、透視時間は 32.9[28.3-37.1]/17.7[14.4-22.7] min ($p < 0.01$)、Ka.r は 141[88-304]/75[47-106] mGy ($p < 0.01$)、KAP は 14[9-29]/7[5-10] mGy · cm² ($p < 0.01$) であった。手法の変化、プロトコルの最適化により、手技線量は大きく低減した。